

11月27日の文化省前の集まりの真相（1）

■ロイターによる報道

11月27日キューバの文化省の前に SNS を通じて午前から若者を中心に人が集まり始め、夕方になるとさらに増えて 300 人近くになりました。この経過をロイターのハバナ特派員サラ・マーシ記者は、27日と29日に「キューバ人アーティスト珍しい抗議を行う。当局は対話を約束」という見出しで、予断と一方的な取材に基づく皮相的な記事を配信しました。日本では、しんぶん「赤旗」を除き、どのマスコミもこの案件を報道しませんでした。赤旗によれば、大要次の通りでした。

見出し：抑圧と検閲に反対 アーティストなどデモ 政府が対話開始で合意

【ハバナ＝ロイター】アーティストや活動家、市民 300 人による抗議行動が 27 日、文化省前で行われ、抑圧と検閲を非難した。デモ終了後、デモ隊は、政府当局者とこれまでに例のない対話の開始で合意した。

パフォーマンス・アーティストのタニア・ブルゲーラ、映画監督のフェルナンド・ペレスの両氏など 30 人のグループは、フェルナンド・ロハス文化副大臣と 4 時間以上にわたって会談し、意見の違いを解決する一連の会合を開始することで合意した。

同グループは、今月禁錮 8 カ月の刑を受けたラッパーや、26 日以来拘留されている反体制派アーティストの事案について、ロハス大臣が見直しに同意したと述べた。これまでキューバの共産党政権は、それらのアーティストについて、最大の敵である米国の傭兵だとみなしていた。

デモ隊は、考え方の異なる人々との対話に政府を同意させたことは歴史的成果だと述べた。

会談に参加した活動家で音楽プロモーターのミシェル・マトス氏は、「今日、特別な炎がともった。私たちは、表現の自由、結社の自由、検閲、物理的抑圧について話した。この 60 年間、省の中でこのような対話が行われたことはなかったと思う」と述べた。

代表が当局者と会談している間、外のデモ参加者は、歌を歌い、10 分ごとに拍手をして、連帯の気持ちを表した。

■集いの実態

実際はどうだったのでしょうか。予断に陥らず、政府側、第三者の報告も取り入れて、事態を再構成すると次のようになります。



←文化省の前に集まった人々

11月27日、午前中文化省の前に集まった人々は、芸術家・知識人で 20 名程度でしたが、SNS を通じたよびかけにより、昼過ぎ 100 人程度となり、夕方さらに増え、200～300 人になりました。参加者は、反政府組織のサン・イシドロ運動 (MSI、

下記に詳述) に賛同するものもいましたが、大多数は独立の芸術家や、政府機関所属の芸術

家でした (Yunior García, 20.11.30 On Cuba)。深夜、反体制強硬派のタニア・ブルゲーラを含む 30 人が、フェルナンド・ロハス文化副大臣、キューバ作家芸術家同盟 (UNEAC)、エルマノ・サイス協会 (AHS、35 歳以下の青年作家・芸術家・知識人の組織) の代表と 4 時間にわたり話合いました。話し合いには、映画監督のフェルナンド・ペレス、著名な俳優のホルヘ・ペルゴリアも平和的な対話の促進のために仲介役として参加しました。二人はマーシ記者がいうように政府批判グループに加担して参加したのではありません (20.11.28 TVcubana)。30 人は反政府派一色ではなく、サン・イシドロ運動のラッパーのデニス・ソリス (受刑者、不敬罪で禁固 8 カ月で服役中) の釈放を求める人々、まだ人数的には、はるかに多い大部分が芸術家と政府機関との関係を心配している人々でした。対話は、憲法の枠内で議論すること、キューバの主権を擁護すること、今後さらに多くの芸術家、知識人を含めて対話する用意があると双方で確認しました (フェルナンド・ロハス文化副大臣 20.11.30 TV Cubana)。

この集まりに対して、「われわれは、キューバ国民の自由に対する戦いを支持する。キューバ国民は表現の自由という普遍的な権利の行使が許されなければならない」とジェイク・サリバン、バイデン次期大統領の安全保障担当補佐官は述べました (20.11.29 Reuters, Marc Frank*)。キューバへの内政干渉に当たる発言でした。

*ロイターのハバナ駐在記者のマーク・フランクは、経済問題が専門ですが、綿密に資料を集めるその経済事情の分析は客観性があり、予断に満ちた立場から報道するサラ・マーシと大きな違いがあります。ニュースを読む場合、こうした各記者の姿勢も考慮する必要があります。

また、サラ・マーシ記者が引用しているミCHEL・マトス氏は、米州機構 (OAS) のアルマゲル事務総長と関係がある反体制活動家で、客観的な見解を述べる立場にはありません。

しかし、文化省の前から青年たちが散会し立ち去ろうとしたとき、参加者のアブデル・アントニオ・カルデナスのスマホに電話があり、外貨ショップを焼き討ちし、警官に火をつけ、恐ろしいことを起こすよう扇動する指示がありました (20.12.04 Cuba Cu)。

■27日の集いに至る歴史的経過：政令第349号の制定

この27日の出来事の前には、サン・イシドロ運動 (MSI) をめぐる米国—キューバ間の確執がありました。

2018年4月閣僚評議会は、政令349を発表しました。この政令は、UNEACの会員5,000名が参加して、激しい議論の末、低俗趣味、悪趣味、無資格の芸術活動を規制する目的で制定されましたが、あいまいな点もあり、補足規定を設けるとされました。米国政府、アムニステイ・インターナショナルなどが、この政令の一定の不整備を利用して自由な芸術活動を損なうものとして反対を表明しました (18.12.07 Nuevo Herald)。同年9月米国政府の意向に従い、アーティスト・知識人、反政府グループである、サン・イシドロ運動 (MSI) が設立されました。運動といっても、メンバーは、今年の11月に至るまで、わずか14名です。そ

のリーダー格のルイス・マヌエル・オテロ・アルカンタラは、国旗を体にまいて便器にまたがったり、海水浴場で国旗を下に敷いて寝そべったりする様子は芸術的パフォーマンスというよりも、刑法第 203 条国旗侮辱罪にあたり、多くの国民に不快感を与えるもので、27 回も逮捕されています。幅広いキューバ市民の支持を得られるものではありませんでした。(20.11.24 Granma, Raúl Capote, ¿Quién está detrás del show anticubano en San Isidro?)。



■ラッパー、デニス・ソリス当局を侮辱し、逮捕される。

こうした MSI の状況でしたが、キューバへの米国の経済封鎖・制裁・ハラスメントが強化され、キューバが、外貨不足、

COVID-19、通貨統一の課題に取り組み、経済が近年にない困難に陥る中、米国は、現在キューバの体制転換を実現する絶好の機会と考えています。そうした米国の意向から、キューバ国内では、米国から支援を受けて国内で社会の攪乱活動を行う反体制家に対処する必要性が出てきました。本年 11 月 9 日、特に著名でも評判が高いわけでもない、初心者に近い(キューバ・ラップ協会、20.11.24 Granma, Raúl Capote)、MSI のラッパーのデニス・ソリスが、フロリダのテロリストとの関係を聴取するための当局の出頭要請に対して、警官を汚い言葉でののしり侮辱、刑法第 144 条、不敬罪に当たるとして逮捕されました。逮捕時、ソリスは、トランプこそ自分の大統領と叫びましたが、ここに MSI の性格がはっきりと見られる事件でした(20.11.30 Video, TV Cubana)。

■MSI の仲間 14 名「ハンスト」へ

3 日後の 11 日、デニス・ソリスは、裁判において不敬罪で禁固 8 カ月に処され、16 日から、MSI の 13 人が MSI のアジトに集まり、ハンストの抗議始めました。ほとんどは無職で、犯罪歴がある人物です。18 日 MSI は、アジトで SNS を通じて「平和的な抗議」を開始し、MSI メンバー以外、独立ジャーナリスト、芸術家、反政府活動家を巻き込みソリスの釈放を要求しました。しかし、ハンストいっても言葉だけで、実際は、水や軽食の接種を行っていることが、ビデオに残っています(20.11.24 Granma, Raúl Capote)。25 日アルカンタラは「ハンスト」を止めました。

22 日になると、デニス・ソリスの供述で米国在住のテロリストとの関係が露わになりました。ソリスは、取り調べで米国からの資金援助、行動の指示を受けていると認めました。ソリスは、亡命キューバ人で、反キューバ活動家のギタリストのホルヘ・ルイス・フェルナンデスとも関係があると認めています(20.11.22 Razones de Cuba)。そうしたことから、この記事は、MSI のハンストは茶番劇と指摘しています。

■MSI の正体明らかにされる

24 日になると、共産党中央機関紙にサン・イシドロ問題について、ラウル・カポーテによる豊富な資料を駆使し徹底して分析した論文が掲載されました(¿Quién está detrás del show anticubano en San Isidro?)。ルイス・マヌエル・アルカンタラがこのグループのリーダー

格ですが、ハバナ米大使館通商担当の臨時代理大使マラ・テカーチから支援を受けていたことを証明しています。MSIのメンバーの一人は、マイアミのテロリストのウィリアム・ゴンサレス・カブレラと関係をもち、コーヒー農園、カフェテリアなどの焼き討ちを相談。外貨ショップの廃止も提案しています。MSIのやり方は、ジーン・シャープの「ソフト・クーデター」の戦略を表していると、カポーテは指摘しています。またマイケル・コザック西半球局次官補代行、マルコ・ルビオ共和党上院議員、ルイス・アルマグロ米州機構事務総長も、MSIの支援を繰り返し述べています。

この日、ポンペオ米務長官が、「サンイシドロ・グループを支持する。デニス・ソリスの逮捕を非難し、国際ジャーナリストは取材から物理的に排除されている。キューバの人権侵害に抗議する」と述べました（20.12.24 US D/S Home page）。これは、いわば袋小路に入っていたMSIグループを勢いづけるものでした。

翌日、MSI支持の集会が開催され、旧市街のパウラ教会の前のルス栈橋で行われましたが、反政府系のウェブ・サイトでも参加者はわずか16人でした（20.11.25 Cibercuba）。

26日になると、ブルーノ・ロドリゲス外相が、ポンペオ米務長官に、キューバへの干渉を止めるように警告し、「ポンペオは、キューバ国民の一部を支援したことがないと、ウソをついている。ソリスは、ミュージシャンのゆえに逮捕されたのではない。キューバでの破壊行為に金銭的に支援した人物



16日のMSI集会

との関係が問題である」と、問題の本質を明らかにしました。また、この日、当局が新型コロナ対策違反として、MSIの本部を強制捜査し、一時的に4人のハンスト者と、その他の9人を逮捕し、ハンストを止めさせました。リーダーのルイス・マヌエル・アルカンタラは、ハバナ市内のマヌエル・ファハルド病院に駆けつけ体調が悪いと述べ、軽い脱水症状が見られ入院措置が取られました。

キューバ政府は、米大使館代理大使、ティモシ・スニガ・ブラウンにMSIとのコンタクト、支援について、外交関係に関するウィーン条約に違反する重大な干渉と抗議しました。

■27日の集まりは茶番劇

こうした事実を辿って見ると、27日の集まりは、自発的に青年芸術家・知識人が集まったものでなく、特定の目的のもとにSNSで呼びかけられたことが想定されます。こうした方法は、2010年のアルデアーンノス事件、2014年USAID（米国開発庁）が、失敗しましたが、スンスネオというツイッター作戦で動員を呼びかけた事件などいろいろ起きています。

11月29日ハバナ市中部のトゥリージョ公園で、米国の干渉に反対し、革命を擁護する27



日の集会に抗議する若者たちが SNS で呼びかけ、いろいろな青年組織も賛同し数百人が集まりました。ディアス・カネル大統領も参加しました。ディアス・カネル大統領は、「彼らは、今年中にキューバ革命を倒壊させ、ニカラグア、ベネズエラ革命を倒壊させなければならないという目標を持っている」と述べ、事件の目的を明確に指摘しました（20.11.30 Granma）。

問題は、サラ・マーシ記者が報道するような、キューバにおける芸術活動の自由への抑圧ではなく、キューバが新たな経済・社会改革に取り組む中での芸術活動の在り方を模索する芸術家、キューバ政府当局の努力に対し、外部から干渉し、自らのモデルを無条件で押しつけようとするところにあります。

—続く—

(2020年12月7日 新藤通弘)